

はなせ診療所そよ風だより No.20

2012年2月 内科 吉澤泰介

私の敬愛するお医者さんで、すてきな物書きでもられる、週1回私が町で診察している京都西陣千本診療所の3代目永原弘道先生の小野郷通信が、とても【粋いき】なので今回その一部を掲載させていただきました。

● 静かな山村小野郷の医者が、昨日今日の世情に煽られて語り始めます。小野郷から外を見る—九鬼周造(クキシュウゾウ)のこと— 花街、上七軒(カシチケン)は、北野神社の横にある。京都に五つある花街で、一番古く、室町時代から続いている。私が花街で遊ぶ事に魅了され始めて十年、女将(オカミ)さんたちや、年輪を重ねたお姐さん方の昔話を聞いても、花街の暮らしはずいぶん変わってきている。でも、変わらないのは、「いき」である事を最高の価値とし、「野暮」な事を嫌い侮蔑するという文化だろう。九鬼周造は「日本では芸者が社会の中で、一定の役割を果たしている事を知るとヨーロッパの人は驚く。…彼女達の理想は、倫理的であると同時に美的な「いき」と呼ばれているもので、逸楽気品の調和した統一である」と言っている。西洋の遊び女は、社会から排除された存在だが、日本の芸妓たちは違う。彼女達は理想の実現と言う社会的役割を持っている。彼女達の理想、それが「いき」だと。生誕百二十三年を迎えている九鬼周造、その母、波津子は祇園の芸妓。父は明治のドン・ジュアンと謳われた男爵、九鬼隆一。周造はその四男。私(永原)の愛読書「いきの構造」を書いた哲学者。周造は、当時としては珍しい百八十センチの長身で、芸妓舞妓を引き連れて歩いていると、頭だけが京極の雑踏の上に飛び出ているそうである。写真を見れば玉三郎ばりの美男で、フランスに十年以上も留学して、哲学者サルトルのパトロンをしたりしているから、さぞかしパリでも浮名を流していたことだろう。芸妓であった母は、周造を身籠ったころ、放蕩児、岡倉天心(明治以降に於ける日本美術の成立に寄与した日本美術画壇の父)と道ならぬ恋に落ち、離別されている。周造は、母を育んだ京の花街を愛し、京大の教授になってからも花街で遊ぶ異色の哲学者として、「いき」に浮世を楽しんだ。「いき」、それは愛した人を心に住まわせ、その人と向き合い、“媚び”て、“意地”を張って、そして“諦め”て、なんとか保つ恋心、そんな姿そんな心持。「センセはほんまに野暮やぼや！」と私(永原)はよく言われる。花街では、言葉は軽く、タンポポの綿毛のように行きかう。軽い。綿毛が頬をぶったか、目に入ったか、「俺を侮辱するのか！」と怒るのは「野暮」の骨頂。白い綿毛の乱舞に、「いき」な芸妓が、客と女将の遊び心に色っぽく絡まって、花街の隅々にまで“人の情”がしみわたる。それが花街。文恭徹誉周達明心居士、享年五十三才、九鬼周造の墓は、法然院にある。(西田哲学で有名な)西田幾多郎の絶筆と言われる文字で、ゲーテの詩が彫られている。『見はるかす山の頂梢には 風も動かず 鳥も鳴かず まてしばし やがて汝も休はん』(下線は、吉澤が、言葉の解説を入れました)

● 名著、土居健郎(どいたけお)の『甘えの構造』に、さまざま人種の、るつぼである西洋では、自己主張しないと、取り残されてしまうが、島国の日本人は、お互いが、なあなあで、通じあわせないと、うまく生きていけない、それを甘えと呼び、その原点は、母に甘えるところからきているとあるが、粋を求める九鬼周造は、母の代わりを、異性関係に求めたとありました。広島市のいわば、京都で言えば新京極のような、広島風お好み焼きの屋台が多数たちならぶ人情たっぴりの下町で育った私には、京の花町の、九鬼の語る垢ぬけした、張りのある、艶っぽさなどの世界などより、花背のような、動物とともに暮らす生活にあこがれてしまい、それこそほんのりとした粋の香(いきのか)が漂ってくるような錯覚に襲われるだけで、とても粋の本質の理解など、無縁でほど遠く、素直に、その奥深さに圧倒され、敬服するだけです。

● 今月の漢方は、大寒の今の季節、身体を温めてくれる生姜(しょうが)。甘草(かんぞう)大棗(なつめ)と共に漢方薬の強い作用から胃腸を守るためほとんどの漢方薬に含まれている。発汗解熱作用もある。